

平成十九年度第十七回全国読書作文コンクール

小学生の部 大賞

一つの命

前野 葵

もし、だれも飼えなかったら、保健所に届けられる一匹の子猫チイスケ。「もしだれも飼い主になってくれなかったら？」千広が聞いた。「かわいそうだけど、安楽死させられるわね」安楽死。その言葉の意味がわかると、四人は黙り込んだ。私はその場面が忘れられない。私は同じ経験をしたことがある。家の近くにたくさん猫がいる場所がある。それは猫の住みやすそうな場所だ。友達の家から帰る時、まだ目が開いていない生後一週間ぐらいの黒い猫がいた。家から、水を持って行ってあげた。私は家に帰って猫を飼えないか聞いてみた。だけど無理だった。そこでだれか、飼える人はいないか毎日さがしてその間、猫には、ご飯をあげていた。そこで問題があった。その問題は、近所の人の事だ。大きな画用紙に「猫にえさを与えないで下さい」と書いていた。たぶん、家の近くに猫が住みついてふんなどをされたら、困るからだろう。私はその紙を見た日からご飯をあげなかった。次の日、保健所へ連れていかれる事

を聞いた。私は、近所の人にもうちよっと待ってほしいと、話した。あと一週間だけ待つという条件の返事をもらった。私は友達に協力してもらって、いっしょにポスターを作ってみた。でも、電信柱にポスターをはるのは許可が必要だったので配ることにした。いるんな人に飼えないか聞いてみた。ようやく、ちょうど猫を飼いたいという人がみつかった。とてもうれしかった。今も幸せにくらしている。私は動物の命と人間の命は同じぐらい大切だと思う。私はこんな経験をしたからこそ保健所は、どんな場所であるのかがわかる。「かわいくなるほど、後で困ったことになる」。本当にそう思う。私も無責任な、名づけ親だった。黒猫だから、「クロ」なんていう名前を付けた。だから千広たちの名前をとって「チイスケ」という名前にする気持ちがわかる。でも、名前を付けて、えさを与えたら、動物は人間を信頼して命を預ける事になる。だから信頼された人間は預けられた命を守っていかなければいけない。募金箱をもっているとお金を入れてくれる人と入れてくれない人がいる。でも、お金を入れてくれない人は、心のない人だと思っではいけない。事情があるかも知れないし、世界中の一人一人には、絶対にいい所があると思う。募金活動をしている時、正土君が来て、愛が死んじゃったことを告げた。私が今飼っている猫も私にとって家族の一人だ。だから動物が死ぬという事は家族の一人が死んでしまうのと同じ事だと思う。和歌子さんは、その事がわかるから、チイスケのために募金したのだろう。「チイスケ基金」で四万八千四百十五円も集めるなんてすごいことだと私は思う。私

も動物のためになにかできるようになりたいと思う。私は、動物の命を大切にしない人を少しでも、減らして、動物の命を大切にしていきたいと思う。

対象図書名 チイスケを救え！

よくわからなくて意味がわかると最初のおどろきの気持ちより2倍おどろいてしまいました。いつも自分の作文に自信がありませんでした。だけど、今回大賞をとれて、本当にいい経験になりました。私はこの経験を活かして、いろいろな作文を書くことにチャレンジしていき、自分の作文に自信をもっていきたいです。今も、私が名づけた猫は幸せに暮らしています。だから私たちも動物たちのたった一つしかない命を大切にしていきたいです。

審査員のひとこと

文章のテンポはいいのですが、段落がなくて読みづらかったのが、少し残念でした。自分自身の、捨て猫のためにいろいろ頑張った経験と比べながら、本の内容を、より深く理解しようとしている点が、大変結構でした。さらに、動物を飼うということは、即ち名前をつけることであるという考えに立って、名前をつけて、餌を与えると、動物は人間を信頼して、命を預ける。だから、信頼された人間は、その命を守って行かなければならないという、自分なりの発見・結論には、見るべきものがありました。

受賞者のひとこと

私は今回、「チイスケを救え！」の本を読んで、人間は同じ命のある動物たちに何をしてあげられるかを考えました。その答えは、私が今まで経験したことから出てきました。それは、同じ命のある生き物だから、命を大切にしていき、動物が毎日楽しく暮らせる環境を作っていけばいいと気づきました。私は塾の先生から「大賞おめでとう」って聞いた時、おどろきで一瞬止まってしまいました。最初は、大賞の意味が

小学生の部 最優秀賞(小四)

私が登った山も火山だった

森本 ひなの

この本は、火山について食べ物の実験を用いて、説明する本でした。世界にはたくさん山があり、その中に火山もとてもたくさんあります。私は家族で山登りをするのがしゅ味です。この本を読むまで、今まで登った山が火山だったのかどうかも考えた事ありませんでした。

火山が噴火すると、小さなスコリアという約一、二センチの石が出てきます。これは噴火した時、三百メートルも飛ぶ軽い石だそうです。これには、小さな穴がいくつもあいているから軽いのです。作者は、エアロチョコレートで説明してくれました。私もおやつにそれを買ってみましたが、本当にくらべてみると軽かったです。そういえば、初めて登った山の大山の七、八合目あたりに、そんな石があった様な気がします。本を読み進めていくと、大山は火山だという事が分かりました。

実に火山が噴火しているのはテレビでしか見た事はありません。火山が噴火すると、赤くドロドロした約千度近い溶岩がたくさん噴出するので。火山には噴火休止期間があって、短いもので数十年、ふつうのもので数百年、長いもので数千年も、休止期間があるので、いつ噴火

するか分からないのです。

富士山の年れいは、十万才です。つまり、十万年間もの噴火活動をしてきたのです。けれど、他の火山に比べるとまだまだ若い方なのです。一番噴火活動をくり返してきた古い火山は、五十万才なのだそうです。私もいつかは、富士山を登ってみたいのですが、できれば噴火口を見たいです。とてもはく力がありそうです。

溶岩流が流れる速さをトンカツソースで説明してありましたが、どんな速さで流れたとしても、千度もある熱さの溶岩流にのみこまれては、山の木も何もかも焼きつくされて、火山以外の自然がこわされてしまいます。また、山のふもとに住んでいる人や家も、のみこまれてしまいます。しかし、火山は数日から、数週間前から前兆現象とよばれる噴火前の異変がおこるので、自主的にひなんして身を守らなければいけないし、火山灰や軽石、温泉など、火山のめぐみもある事が分かりました。

きのう、徳島県の剣山の登山から帰ってきました。大山とはちがつて横に広がる、四国山みゃくの内の一つの山でした。頂上近くにも木や花があり、大山の様に石ばかりということはありませんでしたが、どの山も、私は大好きで、これからも、色々な山を登ってみたいと思います。この本を読むまでは、火山はおそろしいだけの山だと思っていましたが、今はおそれることなく、ぜひ登ってみたいと思います。

私が「世界一おいしい火山の本」を読んでみようと思ったのは、登山が好きで山にきょうみがあったからでした。この本を開いた時、苦手な説明文だと思ったけれど、先生に、「きつと読めるよ。」とはげまされて、何日かかかって読みました。読んでみると、自分が今までに登った山が火山だった事が分かり、あらためて山を好きになれる本でした。先生のご指どうもあり、読書感想文を書き上げる事ができましたが、まさかこのような素晴らしい賞をいただけるとは思ってもみませんでした。この賞をいただいた事を自信に、これからがんばっていきたいと思います。先生、本当にありがとうございました。

小学生の部 最優秀賞(小五)

スズメと出会って

小岸 香菜

「四人の中のどれかの家でかえないかなあ。」
その言葉を見た時、私は二年前に体験したことを思い出しました。二年前、私は友達と四人で公園で遊んでいました。その時、「バサバサッ。」と、何かがおちる音がしました。びっくりして、私たちは何かがおちた場所に行ってみると、羽をケガしたスズメがいたのでした。私たちは、かわいそうだなあと思って、そのスズメをひろいました。そして、持っていたティッシュの上ののせてあげました。

その時、

「私、家で鳥を飼っているから、鳥用のエサと、ケージがあるからいそいでとりに行って来るね。」

と一人の友達が言ってエサとケージを持ってきてくれたのです。すると、

「この鳥、飛べないみたい。」

と、友達がいいました。たしかに、羽をケガしては、鳥は飛べません。だから、私は

「四人の中のどれかの家でかえないかなあ。」

と、言いました。そして、帰る時間になったので、その日は、鳥をかつている友達に、めんどうを見てもらうことにしました。

次の日、公園で会議をしました。

「私の家で、スズメのめんどうをみてあげてもいいよって、いつてくれたの。」

と、鳥をかつている友達が言ってくれたのでみんな安心しました。

そして、何日間もスズメを飛べるようにするとつくんをしました。そして、とうとう、スズメは、もどつりにとべるようになったので、にがしてあげることにしました。

その時はすごく悲しかったけど、自分も、もしお母さんたちのもとへかえれなかつたらと、思うとにがしてあげることにしました。

そして、ちょうどスズメの群れが飛んでいたので、かえしてあげました。その時は、きせきかと思いました。

「よかつたね。」

と、言つてその日は帰りました。

だから、この本の主人公も私たちも生き物をひろつた時に、かわいそうだとつう同じ、気持ちになったと思います。

それにしても、この本の主人公たちはすごいと思います。わけは、ぼんかかつどうをして、チイスケの入院費にしてあげたからです。私も、その主人公たちをみならつて、人や、動物が大ケガをしていたら、ぼんかかつどうをしてみたいと思います。

この本を読んで、

「生きているのはみな、一緒だから、私も、スズメをたすけてよかつたなあ。」

と、今、すごく満足しています。

これからも、弱っている命をみつけたら、どんな人でも、どんな動物でも、どんな昆虫でも、進んでたすけてあげたいと、この本を読んで思いました。

対象図書名 チイスケを救え！

受賞者のひごと

私は、自分の書いた作文が最優秀賞に選ばれたと聞いた時、すごくうれしかったです。そんなすごい賞に選ばれるなんて、思つてもみなかったです。家に帰つてからお父さんとお母さんにまつ先に、「この前、書いた作文が最優秀賞に選ばれたよ。」と、言つとお父さんもお母さんもすごく喜んでくれてうれしかったです。

私は、「チイスケを救え！」の本に出会つて、生きているのはみんな一緒だから弱っている人や動物がいたら進んで助けてあげたいという気持ちでいっぱいになりました。

これからも、たくさん本を読んで自分の気持ちを作文に書いていきたいと思ひます。

小学生の部 最優秀賞(小六)

線香花火

川澄 広稀

おじいさんの最後の夏は線香花火のようだったと思う。始まりは静かに、そしてだんだんと火花が大きくなって、突然ポタツと落ちて終わる。

六年生の三人の子供達との出会いがいまにも死にそうだったおじいさんの心に火をつけた。毎日缶詰かコンビニ弁当しか食べない人が長生きなんかできるはずがない。ぼくだって一日か二日ぐらいは喜んで食べると思う。でも毎日もとなると話は別だ。あきてくるし栄養バランスだつて悪いに決まってる。なんにもやる気がなくてほつたらかしたおじいさんが、料理をしたりさし身を食べたり洗たくをしはじめたのは、三人に見られているからのようだ。ぼくが勉強を部屋でするよりも食卓テーブルの上でするほうがはかどるのと同じことかなと思う。誰かの視線を感じる事が刺激になるのかもしれない。

おじいさんは三人に自分の秘密を話す。三人はひとりぼっちのおじいさんに何かしてあげたいという思いから別れた奥さんを見つけた。おじいさんもはじめはおこったけれど本当は一番知りたかったことだったのだと思う。三人の真面目な気持ちがおじいさんにわかってもらえて

ぼくはうれしかった。

おじいさんは突然火花が落ちるように死んでしまったけれど三人の心の中に、ずっと生き続ける。ぼくのひいばあちゃんは去年の夏に死んだ。病院にお見舞いに行った時は元気でぼくのこともわかってくれて「ありがとう。ありがとう。」と言っていたのにそれからあっという間に死んでしまった。みんな泣いていてぼくも悲しかったけれど涙は出てこなかった。その時は死ぬということがピンとこなかった。ひいばあちゃんの顔はねむっているようだったけれど、ほっぺをさわると冷たくてびっくりした。

今年の夏、この本を読んで生きること、死ぬことについて考えてみた。ぼくはまだ十一年しか生きていない。生きることにはどんな意味を見つければいけないのかはまだ全然不明だ。死ぬことは運命なのだろうか。何もわからないことばかりだ。でもおじいさんは最後に三人の親友が出てひとりぼっちじゃなくなった。短いけれど最高の夏だった。おじいさんは幸せだったと思う。ぼくのひいばあちゃんは幸せだったのかな。ぼくは来春、中学生になる。そして野球部に入部するつもりだ。練習がきつくて暑くても寒くても一生懸命がんばる。一生懸命やっていれば毎日が充実して楽しいと思う。それがぼくが生きているということだ。うまくいかないことがあってもおじいさんの庭に咲いた、へこたれないコスモスのようにぼくも強くたくましく成長していきたい。そしてぼくのひとつしかない大事な命を大切にしようと思った。

中学生の部 大賞

対象図書名 夏の庭

時間と空間

松井 邦央

受賞者のコメント

MVP…プロ野球の最優秀選手賞。

読書感想文のMVPにぼくが選ばれたとは最初はとても信じられませんでした。けれどだんだん喜びが大きくなってきました。今は最高にうれしいです。

感想文を書くことで、ぼくは今までとはちがって自分のまわりのことを注意してながめるようになりました。ニュースや新聞の中から自分の気持ちにピッタリくる言葉をみつけると「これだ。」と思います。

この本を読んで死ぬことは悲しいことだけれど全部がなくなってしまうわけではないことに、生きているとつらいこと楽しいこと、いろんなことがあるからすばらしいということを感じました。これからもたくさん本を読んで新しい世界を広げていきたいと思います。

以前、本で読んだのだが、「同一性の法則」というものがあるらしい。「同じ時期に同じような事件、もしくは同じような事が起こる。」「このことは、僕にとつてとても不思議な考え方だった。何か事件があると、それをまねして事件を起こす模倣犯というものがあることはわかるが、何故全然関係のない場所で、全然関係のない人が同じような事件を起こすのだろうか。

難しいことはよくわからないけれど、この考え方はスイスの心理学者ユングの「シンクロニシティ」という考え方に基づくそうだ。全てではないにせよ、いくつかの偶然の一致は単なる偶然ではなく、文字通りの「同時発生」か、あるいは普遍的な事象を作り出す力の連続性によるものであると信じたのである。もっとも、ユングがこの論を提起した時は、今のような残酷な事件の同時多発の理由として挙げられるとは予想していなかったと思うけれど。僕は「ぼくがウィリアムと名づけたわけ」を読んだとき、この考えが頭の中に浮かんできた。

ジャックは夢を見て、その時この物語の鍵となるゆりかごと出会った。

シンクロニシティの実話の中には、夢と現実が同調して起きた出来事がたくさんあるらしい。それは、何かの暗示や警告だったり、アイデアを授けてくれたり、夢で見た通りのことが起きる、予知の場合もあったりするだろう。夢は、僕たちが普段は意識できない、心の奥深く、潜在意識から現れてくるものだと言ったことがあるから、ゆりかごが夢に出てきたのは、何かの暗示だったのだろうと思う。

その暗示されたもの、ゆりかごが実はタイムマシンの役目をして、三百年前の世界にいざなってくれることになるのだから、僕は同一性の法則を頭に浮かべたのだった。

丈夫で素晴らしいものは、人間よりはるかに長い間この世に存在し、人間の生活を見守ってくれる。ゆりかごは、三百年以上の長い間、赤ちゃんの眠りを見守り、その赤ちゃんを取りまく家族の生活を見守ってきたのだ。ジャックがゆりかごから「呼ばれた」わけは、たまたま自分の家で赤ちゃんが生まれるという事情があったからかもしれないが、僕にはどうしても、必然性があつたように思える。

ジャックは、ゆりかごに「呼ばれて」偶然見かけたそのゆりかごをどうしても欲しくなり、両親にそれをねだった。これが、何かの示唆だったとしたら、ゆりかごが見てきた歴史を見てほしいということだろうと思う。

物語では、イームの町は貧乏たらしく、不便でくさいイメージで書かれている。それは、昔の日本でも同じことだろう。冷蔵庫の無い時代は、

食べ物が腐りやすかつただろうし、シャワーも無い。清潔な服を着ることも難しいし、トイレもない。今の便利な世の中から見れば、当たり前のように思えることが、昔の世の中には無かつた。こんな中だから、ペストがイームで急速に広がってしまったのだと思う。

ペストは恐ろしい伝染病らしい。ペストは二百五十九名もの村民の命を奪つたが、モンペソン牧師の指導があつたから、外界にもれることがなかつた。

日本で奈良時代にききんがあつたり、天然痘という伝染病がはやりしたので、人々の不安を鎮めるために聖武天皇が東大寺の大仏を作つたと学習したが、伝染病は祈つても治すことができない。隔離しないといけないし、もともになる細菌を殺さないといけない。そういう基本的なことを四百年近い前の世界でやってのけたモンペソン牧師は頭がよく、冷静で指導力があつたと思う。このことをジャックに教えたかつたのだろうか。

便利な世の中になつても、人類にとって替わらない物は、命の価値だ。それより価値のあるものはない。

ジャックはそのことをゆりかごを使つてのタイムトラベルを行つて、理解した。今までの歴史から学ぶことはとても多い。ジャックがウィリアムに与えた抗生物質によって、タイムパドックスが生じたかどうかはわからないが、先人の経験をもとに今の世の中の生活を見直すということ、僕はしていきたいと思う。

最後に気になったことは、歴史は繰り返すという言葉も聞いたことがあることである。同じゆりかごで眠るジャックの弟、ウィリアム。ジャックが、病気を過去から持って帰ってきたということは考えられないだろうか。人間が、犯す間違いは繰り返していくような気もする。でも、その時は命を最優先して、素晴らしい文明を使いながら生きていきたいものだ。

対象図書名 ぼくがウィリアムと名づけたわけ

審査員のひょうご

「同一性の法則」で、いきなりびっくりさせられました。ユングが出てくるのにも驚きました。相当の教養の持ち主であることが伺われます。

中学三年生という年代は、いろいろな教養や情報が押し寄せて来て、自分の考えが次から次へとわき出てくる時期なので、それを自分の言葉でどう使って行くか、ああでもないこうでもないと思いを巡らせています。「本の感想文にとどまらず、本から触発されて自分の考えを自分の言葉で書く」ことが、読書作文の神髄ですが、この松井さんは、本から触発された考えを、自分の現実や体験というより、自分の知識や教養の中から見いだして、それが見事につながっているという点は、賞賛に値します。

受賞者のひょうご

僕は、今まで本を読む時、その状況を読み取ることが精一杯で、味わって読むとい

うことはあまり出来なかったように思います。ところが、最近はまだテレビでも観ているように画面が浮かんできたり、においを感じたりするようになってきました。それは、日頃から塾の先生に、単なる読み取りではなく、深く読解することの大切さを教えていただいているからだと思います。

今回、大賞を受賞することができたと聞いて、とても嬉しく思います。本の文字を追うだけでなく、そこからさらに考えを発展していくことが大切だと思いました。今は受験勉強でなかなか本を読む時間が取れない状況なのですが、これから本を読むことが自分の思考を深めるきっかけになるように、積極的な読書の仕方を進めていきたいです。

「マリオネットデイズ」を読んで

三宅 理加

私が、この物語で、一番心に残ったのは、「お前なあ親だって欠点だらけの生身の人間なんだぞ。子供ができたたん悟りを開いて、できた人間になれるわきゃねえんだ。」という言葉だ。秋音の母は何でも、わたしのおかげにするのが得意技だ。この言葉を見るまで、私は、この母を想像すると、いつもイライラしていた。なんで責任をとれないの。頑張ったのは秋音でしょと思っていた。でもこの言葉を見てから、この母はまだ大人になれていないんだ。わたし達と同じなんだと思い、少し理解することができた。

私は、大人というのは、当たり前まえに、私達を、包んでくれて、優しく、大きなものだと思っていた。現に、私はいつも、母と一緒にいて、大きな人だと感じていた。大人は当たり前前にみんなそうだと思っていた。でも考えてみると、私達の中にでも、もしかしたら十年もたたないうちに親になっている人がいるかもしれない。そう思った時、今のままで、秋音の母と同じように子供を苦しめてしまうかもしれない。そう考えて、とても不安になった。

そもそも、私がこの本で、感想文を書こうと思い、ひかれたのは、共感する部分があったからだ。秋音の言葉はいつも、秋音の喉の奥で凍って出て来ないのだ。例えば、親にはなくても、私には、友達にそこまですて出て来ることが言えなかったことが何度かある。それは、傷つけたくないという思いやりもあるが、きらわれるかもしれない。自分が傷つきたくないという気持ちからかもしれない。みんなこんな気持ちになつたことがあるのではないだろうか。つまり、言いたいことが、言えていない人がたくさんいるのだ。でも、私は今、その言葉をとめることは、ほとんど無い。わたしの周りの親や、友達が、私の言葉を、受け止めてくれるからだ。秋音にも、秋音の言葉を受け止めてくれる大切な人が出来た。だから、きちんと自分の思いを言葉にすることが出来るようになったと思う。秋音にとって、母だけでなく、秋音のことを本気で考えてくれる大切な人が増えたのは、本当に良いことだと思う。

秋音のことを支えて、立ち直らせてくれた大切な人にも、秋音と同じように、悩みや、辛い過去、「闇」がある。秋音が弟を亡くしてしまったように、悠司には、幼いころ両親を亡くしてしまった「闇」が。美由紀には、大人に頼らず、信じなくなった「闇」が。愛子や美里にも、だれにでも大きさはちがっても「闇」があると思う。私にも、いつか、大きな「闇」が、出来るかもしれないと思って少し不安になった。でも美由紀は、自分のために頑張れと教室と一緒に行ってくれた。そして、秋音のことを考えた言葉をいつもはっきりと言ってくれた。悠司は秋音のこ

とを本気で心配してくれ、抱きしめてくれた。みんな「闇」を持っているから、秋音の気持ちが分かり、手をかして、助けてあげることが出来たんだろうと思った。だから私も、自分が助けられることもあるだろうけど、だれかの支えになって、助けてあげられる人になりたいと思った。

最後に、私は最初に書いたように、このまま大人になってしまおうと、秋音の母のような大人になれていない大人になると思う。私には、直したいところや、自分のいやなところがたくさんある。もしかしたら、大人になっても、直したいところがたくさんあるかもしれない。でも、「一生のうち一度も傷つかず、誰も傷つけないなんて不可能だ。誰だっているあるから、少しずつマシな人間になれるんだと思うよ。」という悠司の言葉がある。わたしはこの言葉がとても心に残った。その言葉を見て、無理をしなくても、いろいろな体験をしながら、自分なりに、少しずつでもマシな人間になれるように、頑張っていって、少しでも満足していく大人になっていればいいと思った。

そして傷つくことからいげては、いけないと思う。傷つかないように生きていたら、秋音の母のような責任のとれない人になって、周りの大切な人を苦しめてしまうと思う。だから、私が大人になった時、起きたことを人のせいにするのではなく、責任のとれる大人になりたい。これを目標に秋音がこれから頑張るように、私もこれから頑張っていきたい。

受賞者のひとこと

わたしは今年、初めて読書感想文を書きました。夏休みの宿題では、読書感想文は難しいと思っていつも作文を書いていました。今年は、自分なりに悩んで読書感想文を書いてそれだけいいと思っていたので、最優秀賞になったと聞いて、とてもおどろき、うれしかったです。

わたしはこの本を何度も読んでいくうちに、人は、一人では生きて行けないのだと強く思うようになりました。だから、みんなに助けられながら、心の闇に負けない強い心をもってがんばっていききたいです。

伝えるべきもの

松野 彩花

『レネット』その言葉を聞いた時、初めは何の事なのか分からなかった。一体この本はどのような物語なのだろうと色々な場面を想像しつつ、私はこの本の世界へと引き寄せられていった。

読んでいくにつれ、話の内容は理解出来てきた。兄の海飛の突然の死。もし、あの時に父が釣りへ連れて行っていたとしたら海飛はまだ生きていたかもしれない。この事件が、海歌の家庭内環境に大きなひびを入れてしまったのだろうか。

チェルノブイリ原発事故。放射能。この二文を見て私はふと、自分の家の墓に刻まれていた人の事を思い出した。私の家の墓には、ほぼ天寿を全うした人の名が刻まれているのだが、一人だけ十六歳の人の名が刻まれている。驚いた。何故、十六歳という私達と変わらない年令の方が亡くなってしまったのか。やはり原因は、戦争の放射能のせいだった。今回、この物語の事故は戦争で起きたのでは無いが、ただ私はこの物語の中での放射能、そして私の身内に備する人の浴びた、戦争の中での放射能。この二つを通して私が思うのは、放射能というものは本当に痛ま

しい物だという事だ。こんな言葉だけではとうてい表す事は出来ないが、私は心から痛ましくて恐ろしい物だと思う。

ひび割れた家族。そこに光を差し入れたのは、やはりセリョージャだ。

初めの頃、海歌がセリョージャを家族にする事を強く否定していた。私は海歌のその気持ちが分かる。私自身が経験したのではないのだが、父から聞いた話でこれと似た経験をしたという話があるのだ。父の母、つまり私のおばあちゃんが今は亡き私のおじいちゃんと結婚する前に、一度離婚していたらしく、元夫とおばあちゃんの間にも子供がいたらしいのだ。その子供も一応おばあちゃんの子供となる。その話を聞いた時、父も海歌の心理状態と同じく家の中がひどくゆがんで見えたらしい。私は父からこの話を聞いて、何故かとても頭に焼きついた。この時、私ももし自分が父と同じ状況になってしまった場合、耐えられないだろうと思った。それでも父が耐えられた理由。それは、父の姉という存在があったからだ。父は、自分達の他にも子供がいるという事を知るまでは、姉の事をあまり好んでいなかったらしい。でも、この事実を知ってから、自分と同じ気持ちになっているのは姉しかいないと感じる事が出来たらしい。父にとって姉の存在は、セリョージャのレネットと同じくらしい宝なのだ。だからセリョージャはレネットをばらまかれた瞬間、怒りと哀しみにつつまれたのだろう。レネットはセリョージャの思いが詰まった種。セリョージャの持っていたレネットの種は他のレネットの種とはまた違うと思う。セリョージャの持っていた金色の林檎の種は特別

な物だと思う。

放射能が見えれば良いのに、とつぶやいていた海歌。その通りだと私は思った。放射能が見えてさえすれば、どれだけの人が助かっていたか。

物』になると思うから…。

対象図書名 レネット

受賞者のひとごと

今回は、最優秀賞へとお選びいただきましてありがとうございます。まさか自分がこんな素敵な賞をいただく事が出来るとは、本当にびっくりでした。自分自身が『レネット』を読んで感じた事や思った事などを、率直に書いた作文だったので、賞をもらえた事は本当に嬉しいです。今回は、残念ながら部活の試合と重なってしまったので、授賞式へは参加出来ていないのですが、本当に嬉しい気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。また機会があれば、よろしく願います。

中にある時限爆弾の様なものも、おそらくは後遺症だと思う。一九四五年の八月六日に日本の広島・長崎に落とされた原子爆弾。この原子爆弾の威力は恐ろしい物だったと勉強して思い知らされた。チェルノブイリ原発事故は、そんな恐ろしい原子爆弾の落ちた広島・長崎に降り注いだ死の灰の何百倍もの量だったのだ。恐ろしいとか怖いとか、そういうのではない感情が私の中に生まれた気がした。私は今まで日本が唯一の被爆国だとばかり思っていた。だから、一番死の灰が多く降り注いだのは日本だと思っていたのだ。今回の事実は、とても衝撃的なものだった。

私達日本人は、被爆国である国の者なのだから、きちんと放射能の事などの恐ろしさ、そして事実を伝えていかなければならない。なぜならば、これを伝える事が放射能のせいで亡くなった方への大きな『お供え

私とわたし

宮保 玖江

「ひねくれた、意地の悪いもうひとりの“わたし”」。その言葉が今も私の耳に残って離れない。私にも海歌と似たような所があった。

小学校の頃、「あゆみ」という毎日書いて提出しなければならぬ日記のような物があった。私は、あるときから「あゆみ」を書くことが面倒に感じるようになった。それから、ポツリポツリとしか書かなくなり、とうとうまるつきり書かないようになってしまった。

先生に何度も注意されたのに、私は言い訳しかなかった。母に「ちゃんと学校の宿題した？」と聞かれて、私はうそをついて「うん。」と答えた。先生や母をだまし、自分自身にも、うそをついていたのだ。その頃、私の中にはもうひとりの“わたし”がいた。平気で人をだまし、言い訳ばかりするずい“わたし”。本当は、こんなことをしてはいけないと分かっているのに、私はうそをつき続けた。

このことが母にばれたとき、母の怒りはすさまじかった。母は私を怒って怒って怒りつけた。これほど怒る母を私は初めてみて、同時に自分のしたことのおろかさが胸にしみた。母は私に、人をだますということ

がどういふことを教えてくれた。そしてまた、こんな私を信じるようになってくれた。私は母のおかげで、今まで目をそらし続けてきた、もうひとりの“わたし”と初めて向き合うことができるようになったのだ。

また、もう一人私を助けてくれた人がいる。その人とは、姉のことである。私と姉は、ずっと同じ部屋でいっしょに勉強したり、遊んだり、時にはけんかをしたりもした。姉は私の隣でいつも黙々と勉強し努力していた。そんな姉の姿が今も目に焼きついている。このことが私にとつて、大きな支えとなっていたのだ。

海歌を救ってくれたのは、ベラルーシからやってきた一人の少年、セリョージャ。セリョージャは、海歌が優しい心を持っていることを分かってくれていたのだ。海歌はセリョージャと初めて出会った頃から、少しずつ変わり始めていたのだ。人は、ひとりでは生きていけないとよく言うけど、まさしくその通りだと思った。互いになぐさめ合い、励まし合い、時には競い合う。そうすることで私達は今まで生きてきた。もちろん、これからも周りの人の助けが必要となるだろう。自分ひとりの力でがんばってきたと思っても、その奥には誰かの支えが必ずある。海歌にとつてはセリョージャ。私にとつては家族だ。いや、家族だけじゃないかもしれない。私が気づいていないだけで、他にも私を支えてくれた人はもっとたくさんいたのかもしれない。学校の友達、部活の先輩、それから私に何度も注意してしかってくれた先生。その先生は、もう遠くへ行ってしまったけれど、私は先生のことをしっかり覚えている。きつ

とこれからも一生、先生のことは忘れないだろう。

あれから4年が過ぎ、私は中学三年生となった。だからといって、決して私の中にいたもうひとりの“わたし”がいなくなったわけではない。あの頃の私は、もうひとりの“わたし”に負けていたのだ。果たして、今はどうだろう？別に私は、もうひとりの“わたし”に勝ったわけではない。今も私の中にいすわっている。かといって、負けたわけでもない。私は今、戦っている。必死に戦っているのだ。もうひとりの“わたし”こそ、私にとって最大の敵だ。あときの大きな失敗は、私にとって財産となった。あの失敗がなければ、私はまた同じ失敗を繰り返していただろう。海歌もきつと私と同じ思いをしたのではないかと思う。兄の死から、意地悪なもうひとりの“わたし”が起き上がり、友達まで裏切ってしまった。でも、セリョージャとの出会いによって、ひとわりもふたわりも大きく成長し、困難を乗り越えることができたのだ。自分がしてしまった失敗を、次にどう生かすか。そこが一番重要だと私は思う。

もうすぐ夏休みも終わり。いよいよ受験もまっ盛りだ。無理せず、あせらず毎日こつこつ努力したいと思う。